



## 新型コロナに罹患した妊婦の新生児死亡報道を受けて

高橋 司 たかはし・つかさ

弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法学研究科修了。  
「公事宿法律事務所」代表。

令和3年8月19日の報道によれば、千葉県柏市にて新型コロナに罹患して自宅療養中の妊婦が、入院調整中であつたが受入れ先が見つからずそのまま自宅で出産し、その後、新生児が死亡したという。報道された範囲でより具体的に言及すれば、妊娠8ヶ月の30代女性は、令和3年8月9日に発熱や咳などの症状が出て同月11日に柏市保健所から軽症と

判斷されたが、その際、女性からは妊娠している事実は知られていない。同月14日、同保健所が女性に對して健康観察として聞き取りを行ったところ、初めて妊婦だということが分かり、また、酸素飽和度も91%に低下していたことから中等症と判断し優先度の高い患者と位置づけた、翌15日に同保健所から千葉県に入院調整の依頼をしたが見つからず自宅療養を続けたこと、同月17日朝に女性から腹部に張りがあり出血したこと、同日午後4時20分ころに腹部に痛みがあり再出血が認められ陣痛ではないかとの訴えがあつたこと、その後、同日午後5時20分ころに自宅で出産、早産であつたため新生児は救急搬送されたが死亡したという経緯を辿つた。

出産に関連して緊急性が高い妊婦については県単位ではなく都道府県の産科施設が連携して受け入れ先を決める搬送体制が確立されており、千葉県在住の妊婦が都内の医療機関に搬送され得る。よつて、新型コロナに罹患している妊婦であつても出産に関連し緊急度が高いと判断されれば県を跨いで搬送することができる。しかし、実際には、新型コロナに罹患した妊婦の出産に際しては、感染対策のため時間短縮を図ることもあり、その準備が適切にできる医療

判断されたが、その際、女性からは妊娠している事実は知られていないかった。同月14日、同保健所が女性に對して健康観察として聞き取りを行つたところ、初めて妊婦だということが分かり、また、酸素飽和度も91%に低下していたことから中等症と判断し優先度の高い患者と位置づけた、翌15日に同保健所から千葉県に入院調整の依頼をしたが見つからず自宅療養を続けたこと、同月17日朝に女性から腹部に張りがあり出血したこと、お腹の中の胎児を無事に生むことがないかとの訴えがあつたこと、その後、同日午後5時20分ころに自宅で出産、早産であつたため新生児は救急搬送されたが死亡したという経緯を辿つた。

出産に関連して緊急性が高い妊婦については県単位ではなく都道府県の産科施設が連携して受け入れ先を決める搬送体制が確立されており、千葉県在住の妊婦が都内の医療機関に搬送され得る。よつて、新型コロナに罹患している妊婦であつても出産に関連し緊急度が高いと判断されれば県を跨いで搬送することができる。しかし、実際には、新型コロナに罹患した妊婦の出産に際しては、感染対策のため時間短縮を図ることもあり、その準備が適切にできる医療

機関か、新生児をすぐに隔離できる医療機関かという検討課題が生じ、対応できる医療機関も限られているとのことである。

報道によれば、この女性は1人暮らしで、柏市保健所との接点を持つた令和3年8月11日、自らが妊娠していることを告げていない。妊娠中に1人暮らしで不安を抱えながら生活し、しかも、新型コロナに罹患していることが判明したのであれば、自らの身体に対する不安は言うに及ばず、お腹の中の胎児を無事に生むことができるのかどうかがすぐに頭によぎると思われるが、その女性がどうしてすぐに妊娠の事実を伝えなかつたのか、その理由を推しはかることはできない。ただ、報道によれば、女性にはかかりつけ医があり、同医師も保健所や千葉県と連携しながら入院先の調整をしていたことが明らかになつていることを踏まえると、女性には母子健康手帳が交付されていたのであろう。この女性にどういう生活実態が認められていたのかは明らかではないが、仮に、1人暮らしの妊婦であったということなどが「特定妊婦」として要支援対象となつていて、この情報を保健所が認識していないかったとすれば、由々しきこととなる。特定妊婦の情報共有がなされていても、入院先が決まらず早期出産に婦が困難な判断を求められている。

かつたとしても、柏市の選択肢の幅は大きくなつていたであろう。妊娠中の生活の中でもさまざまな不安を抱え、さらに自らが新型コロナに罹患していることを知り、胎児が元気に産まれて来てくれるのかとさぞ心配をしていたことであろう。出産後に自ら救急要請をしているところを踏まえると、その出産 자체も、かかりつけ医がないまま、つまり、医療的サポートもないまま1人自宅で出産することとなり、とても不安であつたことだろう。出産直後の辛い身体的状況の中、救急要請をして救急車が到着するのを待つている間の気持ち、新生児と一緒に医療機関に移動できず、その後、死亡の知らせを聞かなければならなかつた気持ち、自らも新型コロナ罹患者として入院し、子どもの死をなかなか受け入れられないまま辛い闘病生活を続けなければならないなかつた気持ちを考えると、いまでも大変な状況に置かれているものと推察する。特に妊娠後期の妊婦についてはコロナに罹患すると重篤化しやすく、早産のリスクも高まるとの報告もある。他方、厚生労働省からは、ワクチン接種によって胎児、母乳、生殖器に悪影響を及ぼすという報告は現時点ではないとしてワクチン接種を推奨している。